

西洋なし「オーロラ」の安定栽培技術

「オーロラ」は早生で食味が良いことから栽培が増加している。しかし、幼木期の生育が停滞し易く、そのまま枯死する場合があります。また、年によって花芽が少なく必要な結実数を確保できず安定生産が難しいことが栽培上の大きな課題となっている。そこで、北海道立中央農業試験場では「オーロラ」を早生の主力品種として定着させるため、幼木期の生育安定促進技術及び花芽の着生安定化技術を開発したので、その概要を紹介する。

☆ 技術の概要

1. 苗木の繁殖技術として、本圃接ぎ木法では枯死および衰弱樹の発生はなく、慣行法に比べ2年程度の生育促進効果が認められる。大苗ポット育苗法では枯死および衰弱樹の発生は慣行法に比べ少なく、本圃への定植が1年遅いものの慣行法より生育促進効果が認められる。高接ぎ法では枯死樹の発生や生育の停滞はなく、花芽が接ぎ木4年目から着生し慣行法に比べ結実年数の短縮が図られる。



図1 オーロラの結実状況

2. 摘果のみで摘芽および摘花を行わない無処理樹では当年花芽率と翌年花芽率に負の相関が認められ、目標収量 1.5t/10a として結実量確保に必要な花芽率を 25%と推定すると、当年花芽率が 50%以上となる場合、無処理では翌年花芽数が不足する可能性が高い。

3. 翌年花芽率は、摘芽・摘花とも枝別処理および 20cm間隔処理では全樹処理に比べ低いものの、無処理に比べ高くなり花芽着生に対する改善効果が認められ、収量は 20cm間隔処理が枝別処理に比べ多く、花芽着生を安定させる方法として、20cm程度の間隔で花芽を残す摘芽および摘花処理が良いと考えられる。(図1、表1)。

表1 摘芽及び摘花が花芽に及ぼす影響

処理	当年頂芽数	当年花芽数	当年花芽率 (%)	処理時間 (分/1000花芽)	着果程度 (頂芽数/果)	収量 (t)	果実重 (g)	糖度 (Brix %)	翌年頂芽数	翌年花芽数	翌年花芽率 (%)
摘芽											
20cm間隔	1333	1018	77	35	13.7	2.5	264	12.7	2164	366	17
枝別	1487	1087	72	14	15.0	2.1	242	13.0	2311	376	16
全樹	1651	1332	81	31	-	0.0	-	-	2522	1323	52
摘花											
20cm間隔	1156	879	74	60	9.1	3.1	226	12.1	1452	112	9
枝別	1344	1069	80	29	19.2	1.6	241	13.0	1820	252	14
全樹	2335	1808	77	32	-	0.0	-	-	2557	988	39
無処理	1246	982	78	-	7.3	3.5	201	12.0	1615	71	5

摘芽：発芽期前後に花芽をとる
 摘花：開花期前後に花そう単位で花を取る(花そう葉は残す)
 樹齢：高接ぎ樹8年生(母樹13年生) 着果程度：大きいほど着果数が少ない
 収量：樹の大きさの違いを均すため成木期の平均的な頂芽数2000個当たり(10a当たり)に換算して10a当たりで表示

☆ 活用面での留意点

1. 摘芽・摘花の要処理水準は作業の効率等を考慮して、当年花芽率 40%以上とする。
2. 詳細については、北海道立総合研究機構・中央農業試験場・作物開発部・作物グループ(電話：0123-89-2001、電子メール：central-agri@hro.or.jp)にお問合せください。

(農研機構果樹研究所 研究調整役 別所英男)